

資源循環児童学ぶ

東松島8小学校 東北大が出前授業



プラス包装紙の再利用といったSDGsの取り組みを学ぶ児童

東北大と東松島市は、市内8小学校で資源循環や脱炭素を考える出前授業を行った。社会科の単元「ごみ」校で授業を受け、環境問題

の処理と再利用」を学ぶ市の4年生（計341人）が6月から今月にかけて各

や国連の持続可能な開発目標（SDGs）の取り組みに理解を深めた。

東北大と東松島市は、市内8小学校で資源循環や脱炭素を考える出前授業を行った。社会科の単元「ごみ」

の処理と再利用」を学ぶ市の4年生（計341人）が6月から今月にかけて各

や国連の持続可能な開発目標（SDGs）の取り組みに理解を深めた。

や国連の持続可能な開発目標（SDGs）の取り組みに理解を深めた。

同大大学院国際文化研究科の劉庭秀教授が主催し

て今年で6年目。赤井南小（280人）で8日にあつた授業には、児童55人が参加した。劉教授がマイクロプラスチックによる海洋汚染をはじめとする世界の廃

プラ問題、再利用や再資源化による資源循環の意義について講義した。

劉研究室と共同研究などで関わる企業のブースも並んだ。プラス製造販売のコバヤシ（東京）は工業用トウモロコシのデンプンを配合した環境負荷が少ないプラ容器を紹介。廃棄物処理業の青南商事（弘前市）の担当者は「廃車を解体処理すると多様な部品に再利用、再資源化できる」と話し、

分別の重要さを伝えた。

高須賀斗真さん（9）は使
用済み電子機器から金属を
取り出し再利用する「都市
鉱山」の取り組みに関心を
持った。「リサイクルで日
本の環境が良くなると知つ
た。身近なところからSD
Gsに取り組みたい」と話
した。

劉教授は東日本大震災後
の2012年から、被災地

域の小学校で出前授業を行
つてきた。「校庭に仮置き
された震災がれきを見て生
活している子どもたちに、
再利用できる方法があると
伝えたかった」と意義を強
調。「取り組みを広げ、市
内全校で授業ができた。今
後も長く続け、子どもたち
の環境問題への関心を高め
たい」と意気込んだ。